

説教要旨 「目を覚ましていなさい」

ルカによる福音書 12章 35～48節

出エジプトの際、過越の羊を食べるとき、「腰帯を締め、靴を履き、杖を手にして」急いで食べるように神は命じられました（出エ 12:11）。そうした心構えが必要だと、イエス様は三つの譬えを用いて語られています。婚礼に出席した主人の帰りの時刻は分かりませんが、帰りが遅くなればなるほど、寝ずに帰りを待っていてもらえたことを主人は喜びます。その喜びは、主人がその僕たちに仕えてねぎらってくれるほどです。また続いて、泥棒はいつやって来るかは分からないのだから、いつも用心していなければならない。と教えられています。

そして三つめの譬えとして「忠実な管理人と不忠実な管理人の譬え」が語られます。主人の意に反して不忠実である管理人は、主人はまだ帰ってこないだろうと高をくくって、主人の意に反することをします。自分が主人になったかのように錯覚して、共に働く仲間たちに威張り散らし、自分に従わせようとするのです。仲間たちと分け合い、共に養われるために主人から預けられているものを、自分のものであるかのように勝手に用い、自分の欲望をかなえようとします。ここに描かれているのは、自分が僕であることを忘れ、自分こそが主人であるかのように振舞う者の姿です。この僕に決定的にかけているのは神への信頼です。神などいない、いたとしても自分とは関わりのない存在だと、好き勝手に生きる私たちの姿がここに 있습니다。しかし本当に神さまは、私たちと関わりのない存在なのでしょうか。

主人がいつ帰ってきても良いように、いつも目を覚ましていること、それはなにも難しいことではありません。朝毎に、新しい一日を与えられたことを喜び、食事の度に、今養われていることを感謝し、神様が共にいてくださることをおぼえて日々歩むことです。たとえ、苦難の中にあつたとしても、今も“わたし”に注がれている神の恵みに目を開かれたなら、主が共にいてくださる喜びに満たされることができるようなのです。そして、そのように苦難の中にあつても喜ぶ私たちの姿こそが、世の人々に対する大きな証しとなるのです。



(2019・8・11 説教者：稲垣真実)